

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

漱石全集
第十三卷

道
草

全三十四卷 第十七配回本

昭和三十三年一月二十八日 第一刷發行 © 漱石全集 第十三卷

定價 一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

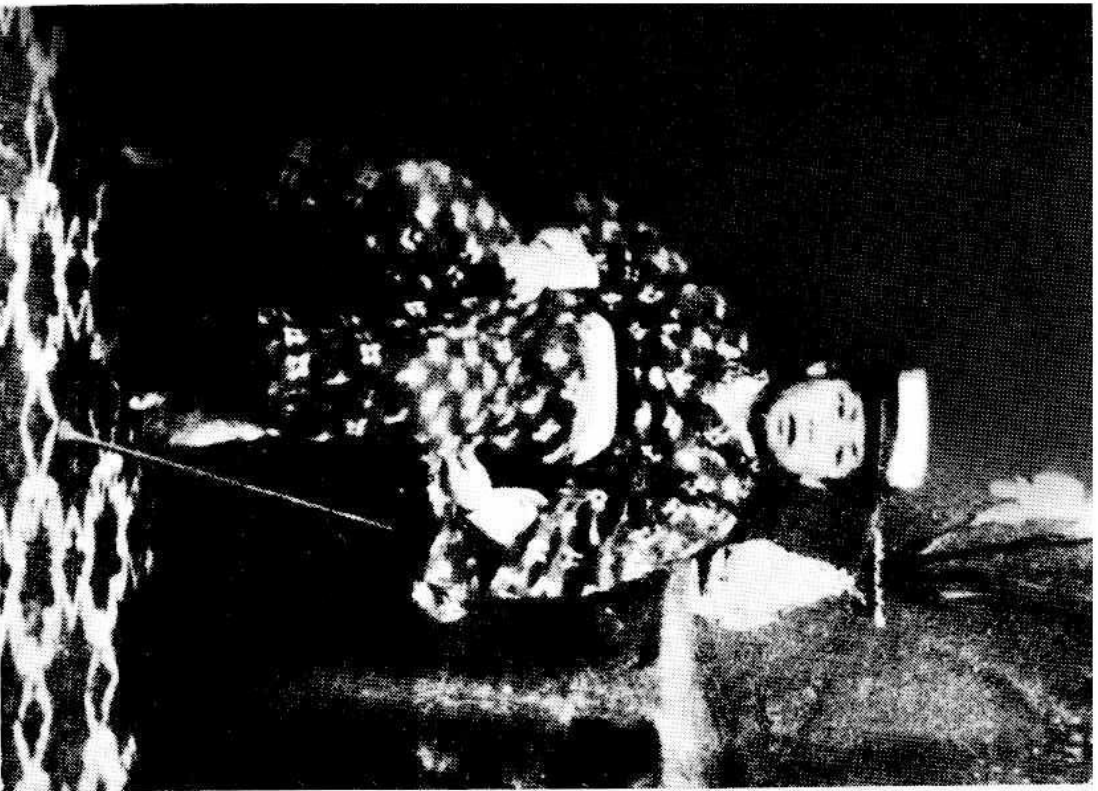
印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地 山田一雄



發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本



十一二歳頃



五六歳頃

目次

道草

注解
解説

三

二三

二四三

道 草

大正四、六、三—四、九、一四

一

健三が遠い所から歸つて來て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。彼の身體には新らしく後に見捨てた遠い國の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振ひ落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて氣が付かなかつた。

彼は斯うした氣分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二返づゝ規則のやうに往來した。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出會つた。其人は根津權現の裏門の坂を上つて、彼と反對に北へ向いて歩いて來たものと見えて、健三が行手を何氣なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けやうとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は靜であつた。二人の間にはたゞ細い雨の糸が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして

又眞正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ氣色なく、ちつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづゝ動いて回るのに氣が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と縁を切つたのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔の事であつた。それから今日迄に十五六年の月日が経つてゐるが、其間彼等はいづ一度も顔を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。黒い髭を生して山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに變らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の手が、何故今でも元の通

り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な氣分を與へる媒介となつた。

彼は固より其人に出會ふ事を好まなかつた。萬一出會つても其人が自分より立派な服裝でもしてゐて呉れゝば好いと思つてゐた。然し今日前見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。帽子を被らないのは當人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判斷したところ、何うしても中流以下の活計を營んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐた洋傘が、重さうな毛繻子であつた事に迄氣が付いてゐた。

其日彼は家へ歸つても途中で會つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に惱まされた。然し細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話し

たい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙つてゐる夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通つた。其次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもう何處からも出て來なかつた。彼は器械のやうに又義務のやうに何時もの道を往つたり來たりした。

斯うした無事の日が五日續いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然又根津權現の坂の蔭から現はれて健三を脅やかした。それが此前と略同じ場所で、時間も殆ど此前と違はなかつた。

其時健三は相手の自分に近付くのを意識しつゝ、何時もの通り器械のやうに又義務のやうに歩かうとした。けれども先方の態度は正反對であつた。何人をも不安

にしなれば已まない程な注意を双眼に集めて彼を凝視した。隙さへあれば彼に近付かうとする其人の心が曇よりした眸のうちにあり／＼と讀まれた。出来る丈容赦なく其傍を通り抜けた健三の胸には變な豫覺が起つた。

「とても是丈では濟むまい」

然し其日家へ歸つた時も、彼はつひに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしたつた。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との關係がとくの昔に切れてゐたし、其上結婚地が故郷の東京でなかつたので、細君の方ではぢかにその人を知る筈がなかつた。然し噂として丈なら或は健三自身の口から既に話してゐたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知つてゐないとも限らなかつた。それは何れにしても健三にとつて問題にはならなかつた。

たゞ此事件に關して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事實が一つあつた。五六年前彼がまだ地方にゐる頃、ある日女文字をんなもじで書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は變な顔をして其手紙を讀んだ。然しいくら讀んでも／＼讀み切れなかつた。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字さいじで書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

其時の彼には自分宛あてでこんな長い手紙をかいだ女の素性すじやうを細君に説明する必要があつた。それから其女に關聯して、是非とも此帽子を被らない男を引合ひきあひに出す必要もあつた。健三はさうした必要にせまられた過去の自分を記憶してゐる。然し機嫌きげん買かひな彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやつたか、その點になると、彼はもう忘れてゐた。細君は女の事だからまだ判然はつきり覺えてゐるだらうが、今の彼にはそんな事を改めて彼の

女ぢよに問とひ訊たづして見る氣も起らなかつた。彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所いっしょに並べて考へるのが大嫌ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介なかだちとなるからであつた。

幸ひ彼の目下もくかの状態はそんな事に屈託してゐる餘裕を彼に與へなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換へると、すぐ自分の書齋へ這入はいつた。彼は始終その六疊敷の狭い疊の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持であるのである。けれども實際から云ふと、仕事をするよりも、しなければならぬといふ刺戟の方が、遙に強く彼を支配してゐた。自然彼はいら／＼しなければならなかつた。

彼が遠い所から持つて來た書物の箱を此六疊の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡うちに胡坐あぐらをかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。さうして何でも手に觸れるものを片端かたはしから取り上げては二三頁ページづゝ讀ん

だ。それがため肝心かんじんの書齋しゆさいの整理は何時迄いつまで経つても片付かなかつた。しまひに此體このていたらくを見るに見かねた或友人が来て、順序にも冊數にも頓着なく、ある丈だけの書物をさつさと書棚の上に並べてしまった。彼を知つてゐる多數の人は彼を神經衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

三

健三は實際其日々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど餘裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。

娛樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙いそがしがつてゐる彼が、ある時友達から謠うたひの稽古を勧められて、

體ていよくそれを斷つたが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇ひまがあるのだらうと驚いた。さうして自分の時間に對する態度が、恰あたかも守錢奴しゆせんどのそれに似通つてゐる事には、丸まるで氣がつかなかつた。

自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤獨おちいに陥らなければならなかつた。彼は臃氣おぼろげにその淋さびしさを感ずる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。だから索寞あらたる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却かへつて本來だとばかり心得てゐた。温あたかい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。

彼は親類から變人扱へんじんあつかひにされてゐた。然しそれは彼に取つて大した苦痛にもならなかつた。

「教育が違ふんだから仕方がない」

彼の腹の中には常に斯ういふ答辯があつた。

「矢つ張り手前味噌よ」

是は何時でも細君の解釋であつた。

氣の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出来なかつた。さう云はれる度に氣不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思つた。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癩癩が細君の耳に空威張をする人の言葉のやうに響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかつた。彼には一人の腹違の姉と一人の兄があるぎりであつた。親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往來をしてゐなかつた。自分の姉や兄と疎遠になるといふ變な事實は、彼に取つても餘り氣持の好いものではなかつた。然し

親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三四回彼等と顔を合せたといふ記憶も、彼には多少の言譯になつた。もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往來する丈で、當分外の方角へは足を向けずにしまつたらう。もし其間に身體の樂に出来る日曜が來たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を疊の上に横たへて半日の安息を貪るに過ぎなかつたらう。

然し次の日曜が來た時、彼は不圖途中で二度會つた男の事を思ひ出した。さうして急に思ひ立つたやうに姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四ツ谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫といふのは健三の從兄にあたる男だから、つまり姉にも從兄であつた。然し年齢は同年か一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。此夫が

もと四ツ谷の區役所へ勤めた緣故で、彼が其處を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なものも構はず、矢つ張り元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

四

此姉は喘息持であつた。年が年中ぜい／＼云つてゐた。それでも生れ付が非常な癩性なので、餘程苦しくないと決して癡としてゐなかつた。何か用を拵へて狭い家の中を始終ぐる／＼廻つて歩かないと承知しなかつた。其落付のないがさつな態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。

姉は又非常に喋舌る事の好きな女であつた。さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがなかつた。彼女と對坐する健三は屹度苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懐が起つた。

其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍しく能く來て呉れたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲團を勧めて縁側へ手を洗ひに行つた。健三は其留守に座敷のなかを見廻した。欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸つてゐた。其落款に書いてある筒井憲といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大變字が上手なんだと、十五六の昔此處の主人から教へられた事を思ひ出した。彼は其主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉か

ら怒られたり、屋根へ登つて無花果を搦いで食つて、

其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。

主人が箱入りのコンパスを買つて遣ると云つて彼を騙したなり何時迄経つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩をして、もう向ふから謝罪つて來ても勘忍してやらないと覺悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が詫まらないので、仕方なしに此方からのこゝ出掛けて行つた癖に、手持無沙汰なので、向ふで御這入りといふ迄、黙つて門口に立つてゐた滑稽もあつた。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出來にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身體の具合はどうです。あんまり非道く起る事ありませんか」

彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「えゝ有難う。御蔭さまで陽氣が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事丈は遣つてゐるんだけど、——でも矢張り年が年だからね。とても昔の様にがせいに働く事は出來ないのさ。昔健ちゃん遊びに來てくれた時分にや、随分尻つ端折りで、夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ぢやとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。

「少し瘦せた様ですね」

「なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから。矢ッ張り癩が強いもんだからね。癩で肥る事が出來ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せ

た。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半圓形の
 暈が、怠さうな皮で物憂げに染めてゐた。健三は黙つ
 て其ばさくした手の平を見詰めた。

「でも健ちゃんは立派になつて本當に結構だ。御前
 さんが外國へ行く時なんか、もう二度と生きて會ふ事
 は六づかしからうと思つてたのに、それでもよくまあ
 達者で歸つて來られたのね。御父さんと御母さんが生
 きて御出だつたら嘸御喜びだらう」

姉の眼にはいつか涙が溜つてゐた。姉は健三の子供
 の時分、「今に姉さんに御金が出来たら、健ちゃんに何
 でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云つ
 てゐた。さうかと思ふと、「こんな偏窟ぢや此子はと
 ても物にやならない」とも云つた。健三は姉の言
 葉やら語氣やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく會
 はなかつた姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「時に姉さんは幾何でしたかね」

「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」

姉は黄色い疎らな齒を出して笑つて見せた。實際五
 十一とは健三にも意外であつた。

「すると私とは一廻以上違ふんだね。私や又精々違
 つて十か十一だと思つてゐた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違ふん
 だよ、姉さんは。良人が羊の三碧で姉さんが四緑なん
 だから。健ちゃんとは慥か七赤だつたね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰つて見て御覽、屹度七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰るのかそれさへ知らな
 かつた。年齢の話はそれぎり已めてしまつた。

「今日は御留守なんですか」と比田の事を訊いて見